《書評》

Joshua D. Zimmerman, *Jozef Pilsudski: Founding Father of Modern Poland,* Harvard University Press, 2022, 623p

寺山　恭輔*

Joshua D. Zimmerman, *Jozef Pilsudski: Founding Father of Modern Poland*, Harvard University Press, 2022, 623p

TERAYAMA Kyosuke

1. はじめに

1931 年 9 月 18 日に勃発した満洲事変に対して、ソ連は日本に不可侵条約を提起したが、この時期にソ連は西部でフランスやポーランドその他の国々とも不可侵条約を締結していた。ソ連のように東西に広大な国土を有する国家にとって、例えば 1939 年のノモンハン事件の際の独ソ不可侵条約締結等、東西どちらか一方で安全保障上の危機に陥った場合、正反対の地域における政策が影響を受けることがあり、満洲事変後のソ連西部周辺諸国家への不可侵条約攻勢はそのようなスターリン指導部の危機感を示すものだろう。

とくに当時のポーランドには、18 世紀末までにロシア、オーストリア、プロイセンによって分割され、消滅していたポーランドを復活させた立役者で、ロシア革命後に対ロシア攻撃も指導したユゼフ・ピウスツキ（1867-1935）が 1926 年のクーデターによって最高権力者として君臨しており、1935 年の彼の死までソ連当局はその行動を注視していた。日露戦争時にはるばる来日し、ポーランド独立のために日本との共闘を提案した過去もあるピウスツキが、満洲事変に際しても日本と共闘するのでは、との疑念を呼び起こし、不可侵条約締結へとソ連指導部を向わせた可能性が高いと思われる [1]。戦間期のソ連にとって主敵と称されることの多いポーランド、その経歴か

*東北大学東北アジア研究センター
『東北アジア研究』28 号（2024 年）、131-137 頁、https://doi.org/10.50974/0002000668
© 2024 TERAYAMA Kyosuke
本著作物は、特に記載がない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際（CC BY 4.0）ライセンスの下で提供されています。https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

らロシアではファシスト、独裁者といったレッテルを貼られることが多いピウスツキに対して、1920 年代から 1930 年代にかけてスターリン指導部がどのような対応を取ろうとしていたのか、という問題に筆者は関心を抱いてきたが、彼についてイスラエルの史家ジョシュア・ジンマーマンによる新しい伝記が刊行された。ジンマーマンによればポーランドにおけるピウスツキ評価はソ連、ロシアにおける評価とはまったく逆で、冷戦終結を機にピウスツキ研究が進み、祖国の英雄としてピウスツキ・ブームが起きているらしい。筆者はポーランド史の専門家ではないため本書の「書評」をする立場にはないが、あくまでもソ連史研究者の立場から本書を「紹介」することで、ポーランド史において最重要人物の一人ピウスツキがソ連、スターリンにとってどのような存在だったのかについて考察する足がかりとしたい[2]。

2. ポーランド独立の父　ユゼフ・ピウスツキ

1867 年に生まれたユゼフ・ピウスツキは先人たちが血を流した 1863 年のポーランド蜂起に対する思い、身分や人種に関係なくあらゆる人々に対する敬意、ポーランド文化の豊かさを母から学んだ。兄ブロスニワフ（後にアイヌ研究者となる）と入ったヴィルノ（現ヴィリニュス）のロシア・ギムナジウム（ポーランド語会話の禁止）で若くして非合法活動を開始し、1885 年にハリコフ大学に入学、翌年にかけて 2 度逮捕され社会主義に関心を抱くようになった。1887 年に摘発されたアレクサンドル三世暗殺の謀議に偶然巻き込まれ、ユゼフは 5 年間のシベリア流刑判決を受けた（兄は 15 年）。バイカル湖北方のキーレンスクで生活し、1863 年蜂起によるポーランド人流刑者等様々な人々から大きな影響を受けた。1893 年初頭にヴィルノに帰還後、同年ワルシャワで結成されたポーランド社会党の指導者にわずか 27 歳で就任した。1895 年には初の外遊先ロンドンで在外ポーランド社会主義者と面会し、続く党大会では独立した民主主義的なポーランド共和国を訴えた。ユダヤ人の多いヴィルノ育ちのためユダヤ人住民との連携を重視し（1898 年 2 月にユダヤ人問題についての論文を発表）、1897 年に結成されたブンドの問題にも関わり、自党にユダヤ人を勧誘した。オーストリアのガリツィアにおけるポーランド人の活動にも注目した（pp.21-141　＊以下本書の頁をさす）。

1900 年 2 月にピウスツキは逮捕されるが、狂気を装ってサンクトペテルブルグから逃走、最終的にオーストリア領ガリツィアに逃亡した。その後再入国し 1902 年 6 月、ルブリンで第 6 回社会党大会を組織した。日露戦争が始まると日本と共闘すべく日本の外交官と接触し、1904 年 5 月には日本の参謀本部から招待され 7 月に訪日、ポーランド人の蜂起への支援を訴えたが、ほぼ同時期に滞日中のロマン・ドモフスキ（その後も右派の指導者として長くピウスツキの好敵手となる）による日本政府への否定的助言のためか、日本との共闘はならなかった[3]。

日本から帰国したピウスツキは当時居住していたクラクフ（墺領）に戻ると、軍事問題の研究を始め、1905 年の第一次ロシア革命を経て社会党の指導権が若手グループの手に移ると戦闘組織の形成に精力的に取り組み、翌 1906 年にかけて、戦闘員教官養成のため訓練センターをクラ

クフに 3 校設立した。学校維持のため一連の郵便列車襲撃によって資金調達していたが、革命運動の退潮とともに 1908 年には党の戦闘組織を解散、党の武装組織ではなく独立を実行するための革命軍の組織として同年仲間と新たに積極的闘争連合（ZWC）を結成し、1910 年までにその司令官となっていた。ルヴフ［ドイツ語のレンベルク、ウクライナ語のリヴィウ、ロシア語のリヴォフ］を拠点にシコルスキの指揮のもとに合法的な準軍事組織ライフル銃手連盟結成後、メンバーは増大しオーストリア・ハンガリー政府はこれを合法化した。この時期、クラクフの学生相手には 1863 年蜂起の歴史を講義し、独立を目指す活動の意義を訴えた（1913 年 1 月には蜂起 50 周年を記念し闘士たちに献花、行進）。バルカン半島では第一次、第二次バルカン戦争が戦われていた時期であり、オーストリア・ハンガリーとロシアの軍事紛争の可能性も出てきたため、1912 年 11 月 10 日、独立を志向するポーランドの 7 政党は連立独立政党臨時委員会を形成、ピウスツキはその軍事司令官に任命された。ブルガリアの敗北で第二次バルカン戦争が終息する直前この臨時委員会は、自分たちが 1863 年 1 月蜂起鎮圧後最初で唯一の全ポーランド統治団体であると称した（pp.142-221.）。

1914 年 7 月のオーストリアの対セルビア宣戦布告は、ピウスツキにとってポーランド独立のためのまたとない機会を提供した。彼はライフル銃手連盟（この時点で 7239 人）に戦闘準備に入るよう命令し、オーストリア軍幹部とポーランドの軍事力動員について調整を始めた。8 月 6 日のオーストリア・ハンガリーの対露宣戦布告とともにピウスツキのポーランド軍もロシア領ポーランドに進軍した。その後この部隊はオーストリア・ハンガリー軍に編成され、ロシア軍の攻勢によりオーストリア・ハンガリー軍とともに西方へ退却するが、12 月に「ポーランド軍団」という名称で呼ばれることになった。1915 年に戦況は変化し、ロシア軍に対する攻勢によりポーランド王国、リトアニア地域は解放され、ピウスツキは解放された土地にポーランド国民政府を樹立すべく準備させた。ここでピウスツキは将来を見通す驚くべき洞察力[4]を発揮している。

> 「ロシアは敗北するだろう。中欧諸国も同様に敗れるだろう。ロシアでは遅かれ早かれ革命が生じるだろう、それに続いてイタリア、オーストリア、最後にドイツで革命が起きるだろう。ポーランドの土地がロシアのくびきから解放され、ロシアを追い出すという闘争が完遂されることで軍団の目的は終わりを告げることになる。そして我々は、オーストリア、ドイツと取引せねばならない軍団の歴史の第二段階に向けて、兵力を増強することになるだろう」（p.244.）[5]。

1915 年末にかけて解放された旧ポーランド王国領では北部をドイツ軍、南部をオーストリア・ハンガリー軍が統治し、最終的に 1916 年 11 月 5 日、いわゆる二人の皇帝（ウィルヘルム二世とフランツ・ヨゼフ）のマニフェストが独立したポーランド王国の成立を発表したものの、ピウスツキの両国に抱いていた不信は、独立したポーランド軍設立に消極的な両国政府の態度によって深まった。1917 年 3 月のロシア革命を挟み、同年 7 月ドイツ軍総督によりピウスツキは逮捕され、ポーランド政府樹立のために設置されていた臨時国家評議会はそれに抗議して自ら解散した（pp.222-278.）。

ドイツ帝国崩壊後の 1918 年 11 月 10 日、ドイツの収容所から解放されたピウスツキは独立ポーランドの父としてワルシャワに帰国した（12 日に「国民英雄」の称号をワルシャワ市評議会が付与）。同年 11 月 18 日に再生ポーランドの最初の政府が作られ、ピウスツキは軍事相を兼務する国家元首となった。8 時間労働制や女性の参政権を導入（カナダ、ドイツ、オーストリアに次ぐ）したが、ピウスツキは「戦時中に軍団、ポーランド軍事組織 POW、その他の組織に奉仕した女性たちは男性同様の仕事をこなした。国家の解放における同等の危険を共有したので、彼らには国家統治において同等の発言権が与えられる」と述べた（p.292.）。一方で 1918 年末のワルシャワではポーランド共産党（18 年 12 月 16 日結成）の影響下に社会主義革命を支持するデモも行われ、1919 年 1 月 5 日に赤軍がヴィルノを占領した。同時に行われていた保守派（パリを拠点とするポーランド国民委員会）との交渉は 1 月半ばに決着しパデレフスキ首班の新政府が発足、セイム（議会）選挙が 1 月 26 日に実施され（296 議席を選挙で、ドイツ議会（ポズナン、西プロシア）、オーストリア議会（東ガリツィア）のポーランド人 44 人は無選挙で選出、合計 340 議席）、1 月 30 日の米国を始め協商国との外交関係が樹立された（仏 2 月 23 日、英 2 月 25 日、伊 2 月 27 日）。セイム開設にあたりピウスツキは「しばしば流血と犠牲を伴う 1 世紀半の闘争は今日勝利した。自由ポーランドという 1 世紀半の夢が現実のものとなった。国民は今日、苦難の長く苦しい時期に続く偉大で幸福な機会を祝っている。すべてのポーランド人の心臓が激しく鼓動している今この時、ポーランド議会の開会を宣する名誉を与えられたことを嬉しく思う。この議会は我が国の唯一の主人かつ統治者となるだろう」と述べた（p.329）。議会でピウスツキは改めて国家元首としての地位を与えられたが、内閣を自ら決定する権限は付与されなかった（pp.279-333.）。

ドイツ軍撤退の空隙を埋めるべくポーランド軍とロシアの赤軍が東部国境で衝突し、19 年春はポーランド軍の進撃が続いた。4 月にはピウスツキが幼少期を過ごしたヴィルノをポーランド軍が占領し、東ガリツィア奪取も進めた。この時期のポーランド軍による反ユダヤ人ポグロムについてピウスツキは、「ポグロムに反対するだけでなく、秩序を維持しユダヤ人を保護するよう厳命した」と述べているが（p.345.）、米国政府が派遣したユダヤ人ヘンリー・モーゲンソーの調査団はポグロムの結果、10 か月で 280 人のユダヤ人が殺害されたと報告している。1919 年 1 月にパリで始まっていた講和会議におけるポーランド問題委員会は、ドイツとの間でポズナンの大部分、上シロンスクをポーランド領とすること（ただしダンツィヒは自由市）、チェコスロヴァキアとはチェシンを両国の間で分割することでポーランド西部国境は画定した。東ガリツィアではポーランド軍が 19 年 7 月にウクライナ軍に勝利する一方、ボリシェヴィキは白軍デニーキンの攻勢を前に 8-9 月にかけてバルト三国やポーランドと和平交渉を行わざるを得なかった。1920 年 3 月ウクライナ、ベラルーシの独立をソヴィエト・ロシアに提言するも拒否されたピウスツキはウクライナのペトリューラとワルシャワ条約を締結後、4 月 25 日ウクライナへの進撃を命令した。帝国主義的な意図はなく、西側の文化、自由を拡大することが目的だと声明を出した。5 月 7 日にピウスツキの騎兵軍はキエフに入城、これに対しトゥハチェフスキーを司令官とする赤軍は 5 月 14 日に反攻を開始、6 月 13 日にポーランド軍はキエフを明け渡して退却、7 月にはミ

ンスク、ヴィルノ、グロドノなどが陥落した。赤軍がワルシャワに接近する中で 7 月 24 日、ピウスツキは国民統一政府を形成、8 月 16 日ポーランド軍は大々的な反攻を開始、赤軍を撃退した。ワルシャワでの敗北後、ボリシェヴィキはヴィルノをリトアニアに渡していたが、10 月 9 日にポーランド軍はヴィルノを奪取し、その後リトアニアとの不和の原因となった。ポーランドとロシアは 10 月 12 日に和平に合意し、翌 1921 年 3 月 18 日にリガ協定が締結された。この間 2 万人近いユダヤ人兵士がポーランド内で抑留されるという問題も生じた（ピウスツキが抑留を命令した証拠、反対した証拠、ともにないが、彼の承認なしに命令が出されたとは考えにくいという）。外交面でピウスツキが重視したのはフランスとの同盟で、1921 年 2 月 19 日、フランスにとっては反独の立場から、ポーランドにとっては反ソの立場からフランス・ポーランド同盟が締結され、これが戦間期のポーランド外交の基調となった。3 月 27 日には議会で最初の憲法が採択された。上シロンスクでの住民投票で、ドイツ編入希望者が多数を占めたのに反発するポーランド系住民が 5 月 3 日に反乱を起こしたため、国際連盟は人口の 46％をポーランドに渡すことで決着させた。1921 年 11 月発表の最初の国勢調査では、少数民族は 30.8％（ウクライナ 14.3、ユダヤ 7.8、ドイツ 3.9、ベラルーシ 3.9％）を占めていた。1922 年末のポーランド最初の大統領選挙にピウスツキ自身は立候補せずに人々を驚かせた。ところが彼が推薦して当選したガブリエル・ナルトヴィチは、少数民族特にユダヤ人の支持を得ており、ポーランド人の代表にふさわしくないとの右派の根強い反発を背景に、就任からわずか 5 日後に暗殺され、民主主義定着の困難さをピウスツキにも痛感させた。1923 年 6 月に参謀総長や戦争評議会のメンバーも辞任した後、ピウスツキは 1863 年蜂起に関する一連の講義を行い、ユダヤ人が蜂起に果たした役割にも言及し、「わが民族の偉大さは 1863 年という画期的出来事にこそある」と訴えた。

3. クーデターによる権力奪取後のピウスツキ

1925 年 12 月にロカルノ条約（ドイツの東部国境は未画定）、1926 年 4 月に独ソ中立条約が締結され、国内ではハイパーインフレに襲われるなど、ポーランドは国内外で不安定さを増した。この状況の中で 1926 年 5 月、ピウスツキは新内閣の顔ぶれに反発、再考を求めるも拒否されたため自身に忠実な軍事力を行使し、3 日間の内戦で多数の犠牲者（兵士 215 人、市民 164 人）を出しながら政府軍を倒して権力を握った。5 月末の上下両院の選挙で 6 割得票したピウスツキは大統領職を辞退し、結局イグナツィ・モシチツキが選ばれた。ポーランド共産党はピウスツキを「ファシスト独裁者」と批判するも、ピウスツキは新政府の目的は汚職システムの撲滅であり、ムッソリーニになるつもりはないと答え、新憲法の策定に乗り出し「我々の憲法が目指しているのは、おそらくアメリカが模範だ」と述べている。1926 年 10 月にはピウスツキ自ら首相に就任し、保守派を含めて組閣した。約 74 万人のドイツ人、310 万人のユダヤ人（9.8％）などの少数民族もピウスツキのクーデターを支持した（例えば 1927 年 2 月、公共の場でのイディッシュ語の使用を認める布告）。1929 年の世界的大恐慌までポーランド経済は順調に拡大し、クーデター後初の

1928 年 3 月の議会選挙ではピウスツキの立場は強化され（与党たる政府支持非党ブロック 28%、少数民族政党 2 割、左派は 26%へ微増する一方、中道＋右派は 1922 年の 6 割から 2 割へ大幅に減少）、28 年 6 月に首相を辞任する直前にもピウスツキは憲法改正の必要を訴えた。その後 1929 年から 30 年にかけて政府とセイムの間の対立は深まり、ピウスツキはセイムの反対派議員への批判を公言、9 月には 14 人のセイム議員を逮捕、東部ガリツィアで強まったウクライナ人民族主義者（1929 年初頭にウクライナ民族主義組織 OUN を組織）の抑圧策に着手した。1930 年 11 月の選挙ではピウスツキが長年望んだ過半数を上下両院で与党が獲得、彼自身は短期間で首相職を辞任した。政府と議会の対立が消えたため、1931 年から 1935 年に死去するまでピウスツキは外交と軍事に専念できた。大恐慌による経済的打撃を受けたポーランドと同じく、ナチスが台頭しポーランド回廊の返還等ヴェルサイユ体制再考を求めるドイツとの関係が、ポーランドの外交にとって大きな課題となってきた。1931 年 10 月彼は、

> ポーランドが直面している国内外の危険の重大さを理解していますか？私がいなくなったら何が起きるでしょうか？誰が現実を直視することができるでしょうか？私が話していることをすべてのポーランド人が理解すれば、国民の利益を守るために彼らは仕事に取り掛かるでしょう。そうでなければポーランドは 10 年のうちに消えるでしょう（p.442.）、と述べた。

ピウスツキの主導でポーランドは 1932 年 7 月 25 日、ソ連と不可侵条約を締結した。一方で彼は、1933 年初頭のドイツにおけるヒトラーの権力獲得に対してヨーロッパでもっとも早く、その危険性を理解した人物の一人とみなされており、4 月には戦時内閣計画も策定し、すでに 4 月 18 日には「ドイツはビスマルク時代同様、ロシアとの協力を夢見ている。そのような協力は我々の破滅の元となるだろう。我々はそれを認めることはできない」、ナチス・ドイツとソヴィエト・ロシアの協力はありそうにないが、「この世界では最も奇妙な同盟がこれまでもなされてきた」とし、それをいかに阻止すべきなのかについて、「西欧諸国の中の意志の麻痺、彼らの短絡思想、我々自身の連邦構想［バルト諸国やウクライナ、ベラルーシとともに対ロシアの連邦国家を構築する考え］の失敗を考慮すると困難なゲームとなるだろう」と述べた（p.452.）。1933 年 10 月のドイツの国際連盟離脱が引き金となり、1933 年末からピウスツキが進めたのはヒトラーのドイツとの不可侵条約の締結だった（1934 年 1 月に調印）。フランスへの依存から独ソ両国の間で均衡を取る政策へと 2 年間で移行したが、この 2 年についてピウスツキはポーランドと二つの隣国［すなわち、ドイツとソ連］との間の平和的関係の構築は続かず、ポーランドとドイツの間の良好な関係は続いてもあと 4 年だと述べたように（p.461.）[6]、彼のかなり厳しい将来への見通しは、将来をほぼ正確に予測するものだった。同時に彼は「国家の司令官は必要なときに物事を遅らせたり、変化させたりする点で創造力を発揮するという才能を持っていなければならず、国家の均衡政策を維持するのは非常に難しい」とも述べた（p.479.）。1935 年 5 月 12 日にピウスツキは亡くなる。

以上がジンマーマンによるピウスツキ伝の概略である。軍人としての教育を受けたわけでもなかったピウスツキが、日露戦争時の外遊を経て軍事の重要性に目覚め、独自に軍事を学び、兵士育成の学校まで作ったことが、10 年後の独立戦争への参戦と独立獲得への道を切り開いたこと

は、まさに国父と呼ばれるにふさわしい活躍だった。政治制度の不備、議会政治の経験の乏しさによる政治的混乱を終息させるという名目で行った 1926 年のクーデターとその後の統治についてジンマーマンの記述は詳しいとはいえず、評価は甘すぎるのかもしれないが、たんなる独裁者、ファシストとしてピウスツキを片付けることはもちろんできないだろう。1934 年 1 月のドイツとの不可侵条約が永続的なドイツとの平和の基礎だとみなし、ヒトラーの軍備拡張策を甘く見たベック外相（p.485.）との政治的嗅覚、洞察力の違いは明白で、その後の歴史を考えるとこの時点でピウスツキを失ったことがポーランドにとって非常に大きな損失だったということを改めて示しているように思われる。

注

1 この観点からの筆者の最近の考察を参照のこと（拙稿「ソ連の不可侵条約政策――日本とピウスツキのポーランド――」『西洋史研究』新輯第 52 号（2023 年）22-40 頁。）。

2 ピウスツキについてロシアでも関心が高く、ポーランド語による伝記はロシア語に翻訳されている。ダリヤ・ナレンチ、トマシ・ナレンチによる伝記（Дарья и Томаш Наленч, *Юзеф Пилсудский: Легенды и факты*, Москва, 1990）、スレーヤによる伝記（В.Сулея, *Юзеф Пилсудский*, Москва, 2009）があり、それぞれの原著は 1986 年、1995 年である。スレーヤの著作はジンマーマンも高く評価している（Zimmerman, p.15.）。ロシア人研究者マトヴェーエフによるピウスツキ伝も出ている（Матвеев Г., *Пилсудский*, Москва, 2008.）。本論ではこれらの著作について論じる時間がなかった

3 ピウスツキの訪日については、阪東宏『ポーランド人と日露戦争』青木書店、1995 年、エヴァ・パワシュ＝ルトコフスカ、アンジェイ・タデウシュ・ロメル『日本・ポーランド関係史――1904-1945』（【増補改訂版】）柴理子訳、彩流社、2019 年、67-87 が詳しい。ポーランド独立後のポーランドと日本の軍事的交流についても同書を参照のこと。ポーランドにおける反共・反ソ組織「プロメテウス」については、寺山『スターリンと新疆』第 4 章（3）ソ連の新疆政策における日本ファクター（209-221 頁）も参照のこと。

4 これ以前にもピウスツキは第一次大戦前夜に次のように予測していた。「バルカンをめぐって近い将来墺露戦争が勃発し、ドイツは疑いなくオーストリア・ハンガリーの側に立つ。そうなればフランスはロシアの側に立って参戦する。英国はフランスを放っておけない。もしも英仏を合わせた軍事力が足りなければ、遅かれ早かれ米国が戦争に引きずり込まれるだろう」（1914 年 2 月 21 日パリの地理学協会での講演をヴィクトル・チェルノーフが書き留めたもの。Zimmerman, p.218-219.）。

5 これは国民政府樹立に向けて、1915 年 5 月にワルシャワに派遣した使者に出した指示に述べられた一節である。

6 セイムの議長が 1934 年 3 月 7 日の日記に書き残したピウスツキの発言。さらに 1934 年 6 月、フランスとの関係について尋ねられたピウスツキは、ドイツとの戦争になるのではないかとフランスの末路を危惧している。フランスはこの戦争に勝たないだろう、と述べたという（op.cit.、p.468）。